

玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

山崎 真治^{1)*}・福永 将大²⁾・片多 雅樹³⁾

¹⁾沖縄県立博物館・美術館：〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

²⁾九州大学総合研究博物館

³⁾長崎県埋蔵文化財センター

*libra23@hb.tp1.jp

要旨：本稿では、九州大学総合研究博物館所蔵の「玉泉館」旧蔵の考古資料コレクション中に含まれる琉球関係資料について報告する。当該資料には、戦前の沖縄・八重山を含む琉球（沖縄県）で採集された石斧等の石器類や高麗系瓦などが含まれており、収集年代や収集地が明確に記録されている点でも資料的価値の高いものである。また、今回の詳細調査によって従来認識されていなかった黒曜石円礫2点が確認された。このような黒曜石円礫は、これまで沖縄県から多く報告されていた佐賀県伊万里市腰岳産黒曜石とは性状が異なるものであり、その産地や来歴について今後の検討を要する。

キーワード：玉泉館，琉球，考古資料，黒曜石

はじめに

2025年は戦後80年にあたる年である。沖縄県立博物館・美術館では、沖縄の日本復帰50年を迎えた2022年前後から、近・現代の沖縄研究をめぐる研究史の掘り起こしを進めており、東京大学総合研究博物館や早稲田大学會津八一記念博物館の協力を得て、各機関に所蔵されている沖縄関係資料の再報告に取り組んできた（沖縄県立博物館・美術館2021, 山崎2022, 山崎ほか2024）。沖縄県外所在の沖縄関係考古資料については、これまでにいくつかの紹介が公表されているが（安里ほか1996・1997, 石垣市教育委員会2020, 嵩元ほか1997a・b・石井ほか2012）、今回取り上げる九州大学総合研究博物館所蔵の「玉泉館」旧蔵の考古資料コレクション（谷澤・岩永2021）中の琉球関係資料については、戦後詳しい検討がなされたことはないようである。今回、筆者らは玉泉館旧蔵資料のうち、特に琉球関係資料についてやや系統的な確認作業と調査研究を実施したので、本稿ではその概要について報告する。

資料の概要

九州大学総合研究博物館の玉泉館旧蔵資料中に含まれる琉球関係資料は、明治・大正期の法曹界で活躍した大井七郎によって収集され、その死後に夫人の大井ウメによって玉泉館に寄贈されたものである。大井ウメが玉泉館に寄贈した資料は580点にのぼり（谷澤・岩永2021）、琉球関係資料はそのうち52点を占める。

収集者である大井七郎（1868～1920）は、山口県山口市出身の法曹で、明治法律学校（現明治大学）、和仏法律学校（現法政大学）卒業後、判検事登用第1回試験に及第し、各地の裁判所検事を歴任した。本資料の主要部分は、大井が那覇に勤務していた際に収集したものと考えられる。『現代防長人物史』（井関1917）によれば、大井は明治42年11月に検事正として那覇地方裁判所に赴任し、大正3年10月には鳥取地方裁判所に転出している。当時の法曹は旧慣調査も積極的に行っており、1910（明治43）年に当時久米島分署長警部だった池口権四郎がまとめた「久米島事情」は、当時那覇地方区裁判所の検事正だった大井七郎あてに提出されている（上江洲1976）。考古資料の収集も、そうした旧慣調査と合わせて実施されたの

かもしれない。

玉泉館所蔵の琉球関係資料は、1928（昭和3）年12月30日に金関丈夫が玉泉館を訪れて資料を詳しく検討し、紀行文の一節に記載したことから学界に知られるようになった（金関1929～1932）。これらの資料は、戦前・戦後の沖縄をめぐる考古学・人類学研究の歩みを紐解く上で、重要な意義をもつことから、今回、山崎と福永の両名で系統的な確認作業と調査を実施することとした。作業は2023年12月26日および2024年8月20日の2回にわたって実施した。また、本資料中に含まれる黒曜石については長崎県埋蔵文化財センターならびに沖縄市立郷土博物館のご協力を得て蛍光X線分析にもとづく産地推定を実施した。

資料解説（表1・写真図版1～7）

資料のリストを表1に、個別写真を写真図版1～7に示す。また、採集地別の資料番号リストを表2に示す。

1928年12月30日に本資料を実見した金関によれば、玉泉館の琉球石器には石斧30点、凹石2点、円石6点の計38点があり、このほかに浦添城跡発見の瓦破片14個があったという。現存する資料を見ると石斧29点、凹石2点、円石（円礫・磨石）6点、石杵1点、瓦類14点で、このうち凹石、円石、瓦類は金関の報告と数量において一致する。ただし石斧については数量がやや異なる。この問題について、No.1537に伴っていた古いラベルには「琉球（計38個）石斧29個 円石6個 凹石2個 石杵1個」と、金関の記載とは異なる点数が記載されており、こちらの方が現状の資料点数と一致する。このことから、当初から石斧の数は29点だった可能性が高いと思われるので、ひとまず、現存する資料は戦前のコレクションの状態をそのまま留めているものと考えておきたい。

各標本の注記は、白字で標本番号が記載され、赤字で日付と出土地が記載される（図1）。赤字注記にある「三、二、一五」のような数字は、日付をあらわしており、「大正3年2月15日」のように解釈できる。このことは、付随するラベルとの照合からも確認できる。また、数字が書かれた小さなシールが添付されたものもあり、こちらは学校備品番号であることが、やはり付随するラベルとの照合から確認できる（図3）。

本資料中、最も古い日付をもつ標本は「明治43年2月琉球八重山島岩崎氏波照間島出」の注記をもつ石斧？（No.1523）である。この「岩崎氏」は、当時石垣島測候所に勤務していた岩崎卓爾の可能性が考えられる。自然石のように見えるが、一部研磨痕がみられるようである。これに次ぐのが「明治44年夏 富川氏ヨリ琉球八重山波照間島」の注記をもつ石斧（No.1513）で、これは後述するように学史上でもしばしば取り上げられてきた著名な分銅形石斧である。

大正2年11月には当時沖縄県立図書館長であった伊波普猷から石器3点（No.1508, 1530, 1531：出所不明）を受領しており、同年同月に浦添城跡で瓦類（高麗系瓦等）を採集している（No.1571～1584）。伊波の著書『古琉球』（伊波1911）所収の「土塊石片録」（明治41年9月「琉球新報」所載）によれば、（恐らく明治40年頃に…引用者註）東恩納寛惇とともに浦添城跡において「癸酉年高麗瓦匠造」の銘のある瓦片（図2）を採集したことを記しており、本資料中に含まれる瓦類は、伊波自身の情報提供または現地案内にもとづいて収集されたものであろう。

そして大正3年には大山、読谷山、荻堂、国吉坂など、各地で28点の石器類を収集しており、この中には大山の駐在巡査から届けられた資料も含まれている。2月から3月にかけて、同一日付で多くの資料が収集されており、大井自身が各地に出向いて探索し、地元住民に資料を乞うたのかもしれない。そして、大正3年秋に沖縄を離任した後は、標本収集も途絶えたと考えられる。

採集地の判明する資料のうち、最も多いのは大山（宜野湾市大山）のもので13点、このうち見付岳、ミツキヲガン、見月うがんだ「見付」とあるものが6点ある。「見付」は、大山貝塚（国史跡）が所在するミスクヤマ（美底山：ミチケーマ、ミスクムイなどと呼ばれることもある）の拝所をさしている可能性が考えられるが、大山集落の屋号にも同様の名称が見られ、別地点の可能性も排除できない（宜野湾市史編集委員会1985、宜野湾市教育委員会1996・2005、平敷兼哉氏私信）。その他、オモロシウトリと記されるものや、駐在巡査から収集したものもあるが、詳細不明である。

大山に次いで数が多いのが読谷山渡久地（渡口）9点と国吉坂6点で、前者は読谷村渡具知に比定でき、ワンパーチン庭と記される資料については、現在でも「ワンパーチン」という屋号が継承されていることから、その

玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

表1 資料リスト

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1503	1	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山村甘藷畑 1503 シール「53」	69.7	67.5	14.2	101.4	第一門之 415	
1504	2	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 大山村オモロシウトリ 1504 シール「54」	74.7	44.6	17.0	98.9	第一門之 416	被火 (部分的に黒色化) 刃部顕著に潰れ
1505	3	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、四月 大山駐在巡查 1505 シール「55」	73.8	56.0	24.7	195.8	第一門之 417	
1506	4	打製石斧または 礮器 (磨製石斧の転用品?)	完形	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂 1506 シール「56」	67.3	39.5	23.7	78.2	第一門之 418	円礮面が大きく残る。一部 に研磨痕が確認できる。
1507	5	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山見付岳 1507 シール「57」	80.4	55.1	27.6	178.0	第一門之 419	刃縁摩滅光沢顕著
1508	6	磨製石斧	完形	緑色岩 (粗粒)	二、一一月 伊波文学士 琉球大山 出か不明 1508 シール「58」	81.1	39.8	22.4	120.6	第一門之 420	刃部損耗
1509	7	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山見付岳 1509 シール「59」	55.6	40.7	16.6	64.6		刃縁光沢顕著
1510	8	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、二一 琉球中城村荻堂区長宅 1510 シール「60」	87.2	50.3	17.4	116.9	第一門之 422	器体中央部表裏面摩滅顕著 刃部損耗顕著
1511	9	磨製石斧	完形	蛇紋岩	1511 シール「61」	79.3	47.1	14.6	94.1		双刃 八重山の石斧
1512	10	磨製石斧	完形	輝緑岩	三、三、二一 琉球中城村荻堂区長 1512 シール「62」	64.8	47.5	23.7	133.4	第一門之 424	刃部潰れ
1513	11	打製石斧 (磨製石斧の 転用品?)	完形	緑色岩? (細粒)	四四夏富川氏ヨリ 琉球八重山波照間島 1513 シール貼付痕あり	79.9	54.2	20.2	147.3		双刃? 刃部顕著に潰れ 表面黒色物質付着 表裏面研磨痕あり
1514	12	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂下畑満 1514 シール「64」	61.9	48.3	20.0	81.4	第一門之 426	
1515	13	磨製石斧	基部	輝緑岩 (黒っぽい)	三、二、一五 琉球大山村見付岳 1515 シール貼付痕あり	66.4	47.1	31.6	157.2	第一門之 427	よく研磨されている
1516	14	打製石斧または 磨製石斧未 成品	完形	緑色岩 (やや粗粒)	三、二、一五 大山村見月うがん山中	88.0	55.5	19.1	144.7	第一門之 428	表面弱く研磨 右側縁一部研磨 裏面摩滅
1517	15	磨製石斧	刃部	輝緑岩	三、二、一五 大山村オモロシウトリ 庭	66.1	53.3	26.2	145.3	第一門之 429	刃部やや潰れ
1518	16	磨製石斧?	基部	片岩 (片状組織顕著)	三、三、二八 国吉坂 1518 シール「68」	61.2	45.6	17.9	73.6	第一門之 430	左側縁に一部研磨痕ある が、折損面は古い (再利用?)。
1519	17	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、八、五 大山駐在巡查 1519 シール「69」	137.8	48.4	18.0	218.0	第一門之 431	研磨後打剥
1520	18	磨製石斧	完形	安山岩 (斑晶質)	三、二、二〇 琉球読谷山字渡口 ワンペーチン庭 1520 シール「70」	133.3	58.1	33.1	403.0		刃部潰れ
1521	19	磨製石斧?	基部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 大山村見月岳下甘藷畑 1521 シール「71」	88.9	54.9	30.2	222.0	第一門之 433	裏面一部研磨痕あり 折損面は古い (摩滅)

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1522	20	磨製石斧	完形	輝緑岩 (黒っぽい)	三、二、二〇 琉球読谷山字渡口 ワンペーチン庭 1522 シール「72」	123.3	51.4	34.7	426.0	第一門之 434	刃部顕著に潰れ
1523	21	磨製石斧?	完形	緑色岩 (細粒)	四三、二月 琉球八重山島 岩崎氏波照間島出 1523 シール「73」	113.4	73.1	27.9	340.0	第一門之 435	表面は研磨されているようにも見えるが刃部は自然の形状のよう
1524	22	磨製石斧	基部	輝緑岩	三、二、一五 大山ミツキワガン ■5■ シール「74」	128.6	57.3	21.7	243.0	第一門之 436	全面研磨しようとしているが不徹底
1525	23	磨製石斧?	基部	輝緑岩	三、二、二八 (一五を消してある) 国吉坂 (大山見付岳を消してある) 1525 シール「75」	101.7	55.3	27.9	290.0	第一門之 437	全体に敲打痕 研磨なし
1526	24	磨製石斧	破損品	緑色岩 (細粒)	三、三、一八 琉球国吉坂 1526 シール「76」	105.5	45.4	25.6	166.3	第一門之 438	裏面、側縁研磨顕著 刃部顕著に潰れ
1527	25	磨製石斧	完形	蛇紋岩	三、八、二七 琉球八重山岩崎氏 黒島出 1527 シール「77」	85.8	43.0	16.4	105.5	第一門之 439	断面半月形 顕著に片刃
1528	26	打製石斧または磨製石斧未成品	刃部	緑色岩 (やや粗粒)	三、二、一五 大山村甘諸畑 1528 シール「78」	84.4	65.2	35.2	311.0	第一門之 440	
1529	27	磨製石斧?	基部	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂 1529 シール「79」	89.6	44.9	28.4	204.0	第一門之 441	四周弱く研磨
1530	28	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	二、一一月 伊波普猷氏ヨリ受 出所不明 1530 シール貼付痕あり	49.7	78.8	22.2	112.3	第一門之 442	
1531	29	磨製石斧	基部	緑色岩 (やや粗粒)	二、一一月 伊波氏ヨリ受 1531 シール「81」	100.6	42.8	20.5	144.9	第一門之 443	
1532	30	円礫		黒曜石	1532	54.0	41.2	29.3	87.2	第一門之 444 「琉球渡久地」と書かれたラベルもあり	漆黒色。斑状の赤色部あり。
1533	31	磨石		緑色岩 (細粒)	三、三、二〇 渡久地 1533 シール「102」	67.8	51.8	51.2	285.0	第一門之 445	
1534	32	円礫		黒曜石	1534 シール「10■」	51.1	42.2	30.4	90.7	第一門之 446	漆黒色。斑状の赤色部あり。 一面研磨
1535	33	磨石		緑色岩 (細粒)	三、二、二〇 渡久地 1535 シール「104」	51.8	54.3	50.5	224.0		
1536	34	磨石		緑色岩 (細粒)	読谷山渡久地 1536 シール「105」	63.9	48.7	47.6	249.0	第一門之 448	
1537	35	磨石		砂岩	1537 シール「106」	47.1	56.8	36.9	135.5	第一門之 449 ラベルには「読谷渡久地」となっているものもあり	
1538	36	凹石		緑色岩 (細粒)	1538 シール「107」	88.5	65.9	43.6	434.0	第一門之 450 ラベルは「琉球渡久地」となっている	赤色物付着 (注記の顔料?)

玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1539	37	凹石		緑色岩 (細粒)	三、二、二〇 中城村欽堂畑側 1539 シール「108」	65.5	53.0	28.5	128.1	第一門之 451	
1540	38	石柱		花崗岩	三、二、二〇 琉球読谷山村字渡口 1540 シール「110」	116.9	61.5	42.7	498.0	第一門之 452	
1571	39	瓦			大正二年十一月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 1571	67.1	93.3	22.1	149.1	第四門之 313	
1572	40	瓦			1572	95.1	78.3	25.6	138.1	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 314	
1573	41	瓦			1573	81.1	82.6	28.6	156.2	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 315	
1574	42	瓦			1574	93.8	66.1	23.2	161.3	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 316	
1575	43	瓦			1575	96.4	76.9	67.8	263.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 317	
1576	44	瓦 (焼き物)			1576	61.9	55.7	32.7	100.5	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 318	
1577	45	瓦			1577	83.3	59.0	42.2	133.8	琉球浦添城跡採収 第四門之 319	
1578	46	瓦			1577	89.7	76.2	16.8	121.7	琉球浦添城	
1579	47	瓦			1579	100.4	78.8	18.0	140.7	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 321	
1580	48	瓦			1579	146.8	88.0	20.0	311.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 322	
1581	49	瓦			1581	63.4	69.0	19.3	102.6	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 323	
1582	50	瓦			三、一一月 琉球浦添城跡 1582	118.4	85.3	19.1	248.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 324	
1583	51	瓦			1583	81.0	83.6	18.1	99.9	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 325	
1584	52	瓦			三、一一月 琉球浦添城跡 1584	129.3	93.0	23.1	243.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 326	

表2 採集地別の資料番号リスト

採集地	番 号							
大山	1519	1505	1508※	1524	1509	1503	1515	1507
	1504	1517	1528	1521	1516			
荻堂	1539	1512	1510					
国吉坂	1525	1526	1506	1518	1529	1514		
黒島	1527							
渡久地 ／渡口	1520	1522	1532※	1533	1535	1536	1537※	1538※
	1540							
波照間	1513	1523						
黒島	1527							
浦添城跡	1571	1572	1573	1574	1575	1576	1577	1578
	1579	1580	1581	1582	1583	1584		

※は不確実（注記ではなく付属ラベルの記載にもとづく）

番号は表1に対応。



図1 資料の注記等の状況 (No.1504)



図2 浦添城跡採集の高麗系瓦 (No.1582)

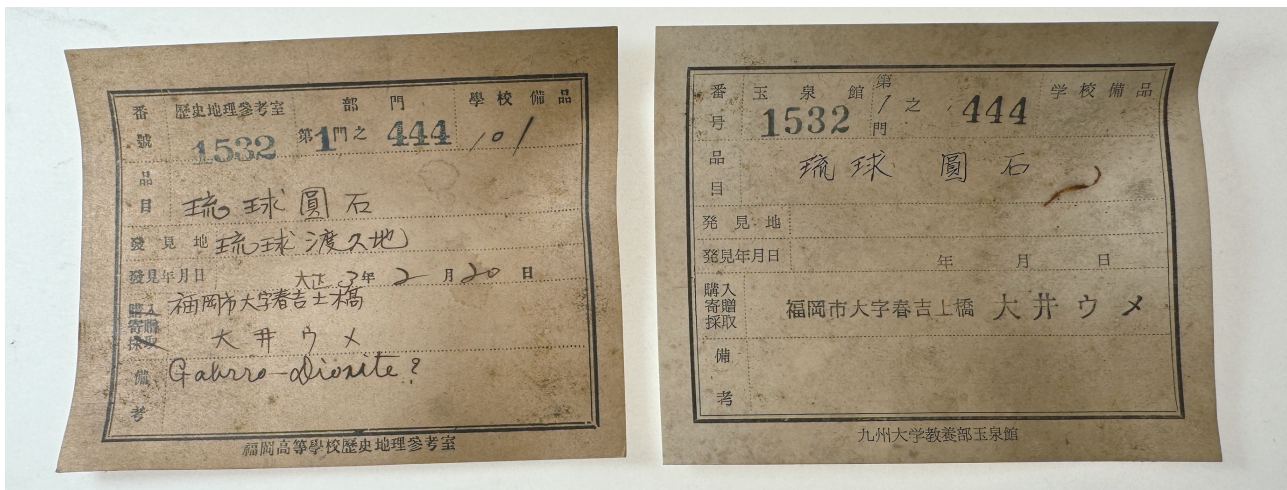


図3 標本に付属するラベル（左が福岡高等学校，右が九州大学教養部時代のラベル）



写真1 No. 1503 磨製石斧



写真2 No. 1504 磨製石斧



写真3 No. 1505 磨製石斧



写真4 No. 1506 打製石斧または礫器



写真5 No. 1507 磨製石斧



写真6 No. 1508 磨製石斧



写真7 No. 1509 磨製石斧



写真8 No. 1510 磨製石斧



写真9 No. 1511 磨製石斧



写真10 No. 1512 磨製石斧



写真11 No. 1513 打製石斧

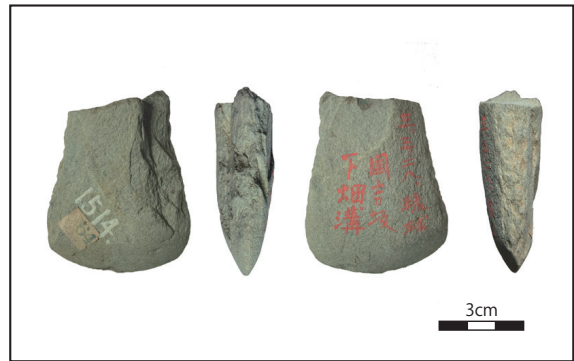


写真12 No. 1514 磨製石斧



写真13 No. 1515 磨製石斧



写真14 No. 1516 打製石斧または磨製石斧
未成品



写真15 No. 1517 磨製石斧



写真16 No. 1518 磨製石斧？



写真 17 No. 1519 磨製石斧



写真 18 No. 1520 磨製石斧

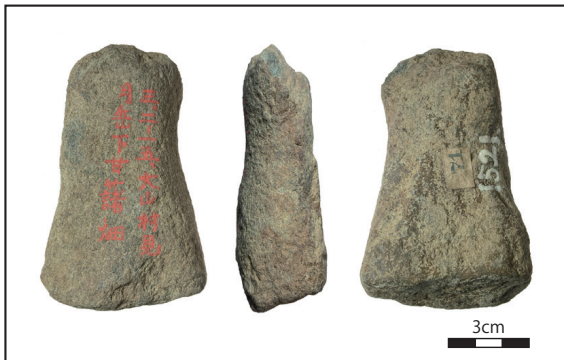


写真 19 No. 1521 磨製石斧？



写真 20 No. 1522 磨製石斧



写真 21 No. 1523 磨製石斧？



写真 22 No. 1524 磨製石斧

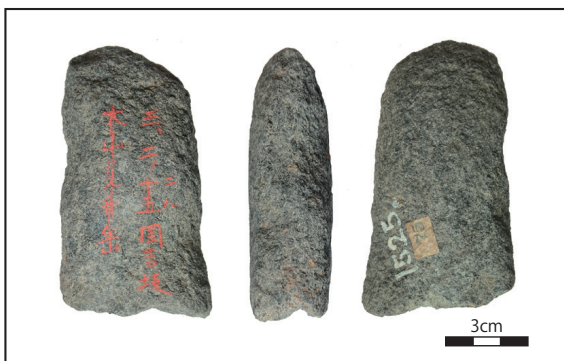


写真 23 No. 1525 磨製石斧？



写真 24 No. 1526 磨製石斧



写真 25 No. 1527 磨製石斧



写真 26 No. 1528 打製石斧または磨製石斧未成品



写真 27 No. 1529 磨製石斧？

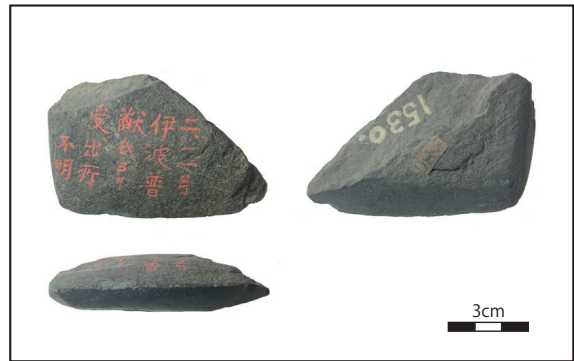


写真 28 No. 1530 磨製石斧



写真 29 No. 1531 磨製石斧



写真 30 No. 1532 円礫（黒曜石）



写真 31 No. 1533 磨石



写真 32 No. 1534 円礫（黒曜石）



写真 33 No. 1535 磨石



写真 34 No. 1536 磨石



写真 35 No. 1537 磨石



写真 36 No. 1538 凹石



写真 37 No. 1539 凹石



写真 38 No. 1540 石杵



写真 39 No. 1571 瓦



写真 40 No. 1572 瓦



写真 41 No. 1573 瓦



写真 42 No. 1574 瓦



写真 43 No. 1575 瓦



写真 44 No. 1576 瓦？



写真 45 No. 1577 瓦



写真 46 No. 1578 瓦



写真 47 No. 1579 瓦



写真 48 No. 1580 瓦



写真 49 No. 1581 瓦



写真 50 No. 1582 瓦



写真 51 No. 1583 瓦



写真 52 No. 1584 瓦

写真図版 7

近辺で採集されたものであろう(上地克哉氏私信)。後者は糸満市真謝原に所在する国吉坂石器片散布地(糸満市教育委員会1981)に相当するものと思われる。このほか、詳細不明ながら荻堂(3点)や黒島(1点)で採集された資料があり、前者は北中城村荻堂に所在する荻堂貝塚や荻道遺跡との関連性が考えられる。

個別の資料について見ていくと、No.1503, 1510, 1514, 1519, 1530のように扁平で刃部磨製(身部の研磨が不徹底)の石斧は、南島爪形文土器や曾畑式など貝塚時代前1~2期(縄文時代早・前期)頃にしばしば見られる(新田2000, 大堀2014)。No.1506のような円礫に刃部を設けた打製石斧は珍しいものである。No.1511は出所不明だが、形態と石材から見て八重山諸島に由来する可能性が考えられる。

No.1513は、いわゆる分銅形を呈する打製石斧で、以前から南方とのつながりを示すものとして取り上げられてきた。金関丈夫ら(1964)は、「刃部の形成は不十分」としつつも、「紅頭嶼に発見される島田髻型(waisted form)の石器と酷似している」と述べており、彼らが類

似資料として言及した、紅頭嶼(現在の蘭嶼)のタオ族(ヤミ族)が使用したといわれるチチブ・チブ・ノ・イナボは、畑作での除草用と推定されている(国分1981: 430頁)。ただし、金関らも指摘するように、No.1513の刃部に相当する部位は平坦面をなしており、刃部を持たないことから、Andersonらのようにこれを錘とみなす意見もある(Anderson and Summerhayes 2008)。また、表面の過半と裏面の一部が黒色皮膜状の付着物(?)に覆われているように見える点は、違和感を覚える点である(図4)。このような形態の石斧はその後の波照間島の遺跡調査でも確認されておらず(沖縄県教育委員会1986)、その取り扱いには配慮を要するものと言えよう。

No.1523は石斧とされるものであるが、研磨の程度は非常に弱く、ほぼ自然石と言って良いだろう。No.1532, 1534は黒曜石の円礫で、形状や石質は互いによく類似する。漆黒色・良質の黒曜石だが、一部に赤色の斑文が見られる。人為的な剥離痕はない。No.1534は一面に平坦な研磨面があるが、この周囲のみに泥が付着しており、古いものではない。この2点の黒曜石円礫については、

今回、蛍光X線分析を実施したので、その結果については後述する。No.1538はいわゆるクガニイシ（白木原1978）状を呈する磨石である。No.1571～1575、1577～1578は瓦当、No.1579～1584は平瓦で銘のあるもの。No.1576は瓦質の焼物だが、何らかの部材になるものだろうか。

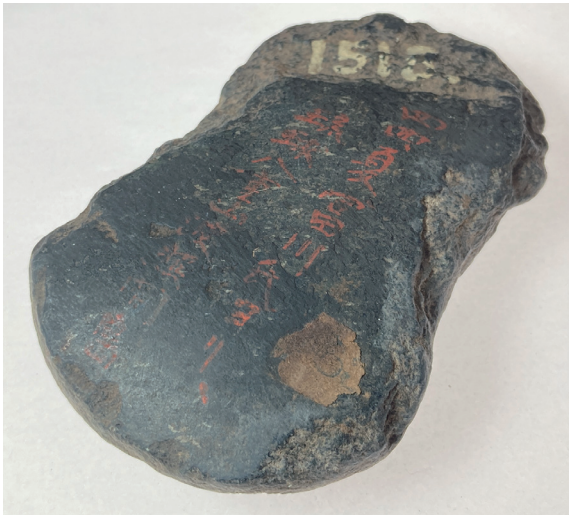


図4 No.1513の刃部の状態と黒色付着物(?)の状況

黒曜石の産地推定

玉泉館旧蔵資料中に含まれる黒曜石2点および沖縄市中の町小学校採集の黒曜石1点について、蛍光X線分析にもとづく産地推定を実施した。分析にあたっては長崎県埋蔵文化財センターの機器を使用した。

試料の概要

分析試料の写真を図5に示す。玉泉館旧蔵資料中の黒曜石円礫2点については前項で詳しく取り上げているので、ここでは中の町小学校採集の黒曜石円礫1点について述べる。本資料は2008年8月に中の町小学校の6年生から沖縄市立郷土博物館に寄贈されたもので、中の町小学校の運動場で採集したものとされる（比嘉2010）。鶏卵大の大きさで、計測値は長さ6.6cm、幅5.6cm、厚さ4.5cm、重量196gである。ほぼ全体を円磨面に覆われた漆黒色かつ良質の黒曜石で、一部に赤みがかった部分も認められる。表面に付着物やマトリクス等はなく、人為的な剥離面も認められない。小学生の採集品であるため、詳しい来歴は不明だが、報告者の比嘉清和によれば、小



図5 分析資料写真

左2点が玉泉館旧蔵資料（左No.1534、右No.1532）、右が中の町小学校（沖縄市）採集資料。

学校の学校教材である可能性や現代における持込の可能性は低く、沖縄の遺跡から多く出土する佐賀県伊万里市の腰岳産を中心とする黒曜石の中にも、このような黒曜石円礫は認められない（小畑ほか2004）。小学校現地も周知の遺跡とはなっていないが、遺跡に由来する遺物の可能性は否定できないという（比嘉2010）。

分析の方法

分析には、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊で定性分析を実施し、判別図法によって原産地を推定した。装置の仕様及び分析条件は以下のとおりである。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置：SHI ナノテクノロジー株式会社（現株式会社日立ハイテクサイエンス）製「SEA1200VX」を使用した。下面照射式で照射径は8mmΦ、Rh（ロジウム）管球、SDD 検出器で液体窒素を要しない。分析条件は管電圧40kVで管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気中で、測定時間100秒（デッドタイム30%前後でのライブタイム）で、資料の平坦部分を選択して2回ずつ分析を実施した。

産地推定の手法は、測定した元素のうち、K（カリウム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の7元素のX線強度（CPS値）から下記の①～④のパラメータを用いて、①・②の散布図（以下、Rb散布図）と、③・④の散布図（以下、Sr散布図）の2種類の散布図（判別図）を作成するという望月・池谷方式に基づいている（望月ほか1994）。

- ① Mn 強度×100 / Fe 強度
- ② Rb 分率 = {Rb 強度×100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)}
- ③ Log (Fe 強度 / K 強度)
- ④ Sr 分率 = {Sr 強度×100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)}

表3 分析結果

資料情報			蛍光X線検出強度(cps値)							Rb散布図		Sr散布図	
都道府県	採集地	分析ID	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K
47-沖縄県	九州大学	九大1532-01	57.840	23.368	617.808	241.799	106.923	129.971	230.320	34.10	3.78	15.08	1.03
47-沖縄県	九州大学	九大1532-02	52.033	23.033	627.747	236.442	100.994	126.059	226.729	34.26	3.67	14.63	1.08
47-沖縄県	九州大学	九大1534-01	59.082	25.640	649.170	243.232	104.918	130.675	235.526	34.05	3.95	14.69	1.04
47-沖縄県	九州大学	九大1534-02	59.054	24.429	600.757	232.684	101.323	124.689	224.600	34.05	4.07	14.83	1.01
47-沖縄県	中の町小学校	中の町小学校-01	57.451	23.242	556.242	229.771	101.362	125.677	220.582	33.92	4.18	14.96	0.99
47-沖縄県	中の町小学校	中の町小学校-02	61.736	23.913	563.957	240.550	102.387	127.658	226.248	34.52	4.24	14.69	0.96

※資料1点につき分析対象位置を変えて2回ずつ測定。

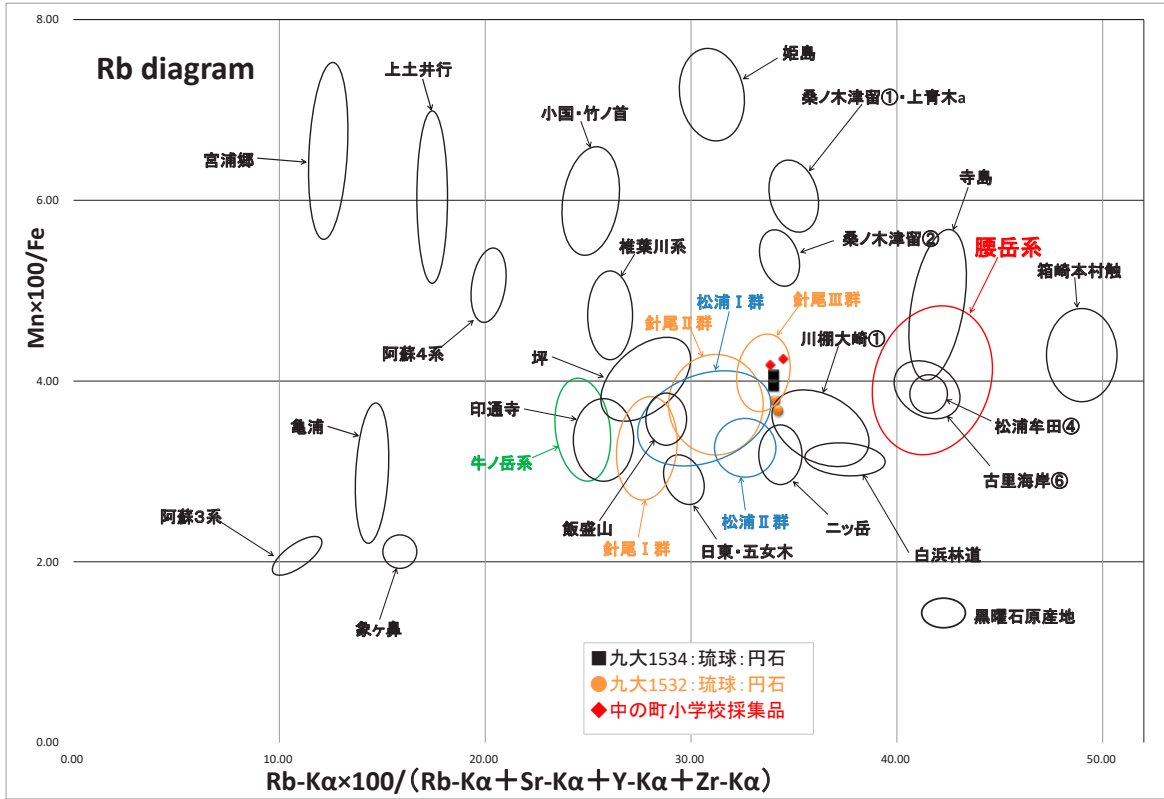
度 + Zr 強度}

長崎県埋蔵文化財センターでは、九州各地から産出する黒曜石の元素データの収集に努めており、現在までに36箇所の原産地から採集した、約1500点の黒曜石原石のデータを整備している。ただし、本州と近隣離島および北海道の産地についてはデータ整備途中であるため、今回採用した判別図法で判別できる範囲は、原則として九州の黒曜石産地に限られる。

分析結果

分析結果を表3に、判別図を図6に示す。判別図によれば、いずれの資料も「針尾Ⅲ群」の範囲内あるいはこれに近い位置にプロットされ、「松浦Ⅰ群」の範囲にも隣接する。少なくとも、沖縄で多く出土する腰岳産黒曜石とは異なっている。

今回分析を実施した玉泉館旧蔵資料や中の町小学校のような黒曜石円礫は、肉眼観察では長崎県松浦市牟田から産出する黒曜石（川道・片多2018）に類似するとのことであり（柳田裕三、川道寛氏私信）、今回の産地推定結果でも、牟田を含む「松浦Ⅰ群」に近い位置にプロットされていることは注目される。牟田産黒曜石は、主に旧石器時代に用いられた石材であり、縄文時代以降の使用例は少ないとされる。仮にそのような石材が、沖縄の遺跡から実際に出土したのであるならば、重大な問題を提起することになるが、今回の分析資料は来歴に不明な点も多く、資料が遺跡出土品でない可能性を想定すると、九州以北の日本列島産、あるいはフィリピン以南の東南アジア・オセアニア地域産という可能性も排除できないため、本稿では分析結果の提示に留めたい。いずれにせよ、これらの黒曜石の産地と来歴の探求は、今後の検討課題となるものである。



腰岳系: 腰岳、有田川、松浦Ⅲ群(松浦牟田③、松浦大崎③)、松浦牟田⑤、古里海岸⑦
 牛ノ岳系: 牛ノ岳(土器田)、針尾米軍基地、久木島米軍基地、砲台山、前畑弾薬庫、淀姫神社・東浜
 椎葉川系: 椎葉川、古里海岸② 阿蘇4系: 国見町海岸、神代海岸、和泉町、的石 阿蘇3系: 御船町、長谷峠 小国系: 小国、竹ノ首
 松浦Ⅰ群: 松浦牟田①、松浦大崎① 松浦Ⅱ群: 松浦牟田②、松浦大崎② 松浦Ⅲ群: 松浦牟田③、松浦大崎③
 針尾Ⅰ群: 針尾中町①、古里海岸③ 針尾Ⅱ群: 針尾中町②、古里海岸④ 針尾Ⅲ群: 針尾中町③、古里海岸⑤

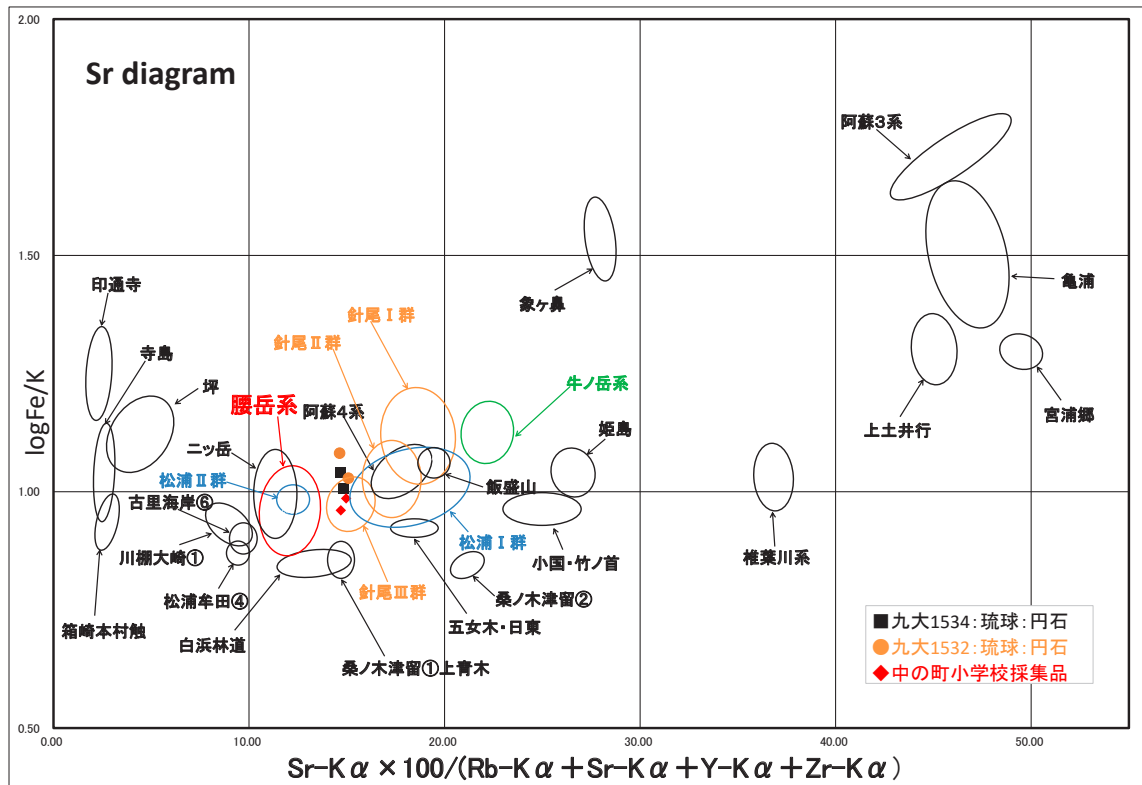


図6 黒曜石原産地判別図(上: Rb 散布図、下: Sr 散布図)

謝辞

本報告をまとめるにあたり、長崎県埋蔵文化財センター、沖縄市立郷土博物館、平敷兼哉（宜野湾市立博物館）、大城一成（糸満市教育委員会）、上地克哉・仲宗根求（世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム）、菅原広史（浦添市教育委員会）、柳田裕三（佐世保市教育委員会）、川道 寛（西海市立大瀬戸歴史民俗資料館）、山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）、赤井文人（北海道教育委員会）、中村雄紀（北見市教育委員会）、藤木 聡（宮崎県埋蔵文化財センター）の皆様にはさまざまにご教示賜りました。また、本稿の内容について査読者より有益なコメントをいただき、内容を改善することができました。上記の皆様は心より御礼申し上げます。

本研究は科学研究費補助金（18K06445）「沖縄島におけるヒト渡来最初期の人類史を探る」（研究代表者：藤田祐樹）による研究成果の一部である。

文献

- 安里嗣淳・丑野 毅・小田静夫・新里 康 1996「東京大学総合研究資料館所蔵沖縄発見石斧一覧」『史料編集室紀要』21 沖縄県立図書館
- 安里嗣淳・丑野 毅・小田静夫・新里 康 1997「東京大学総合研究博物館所蔵の沖縄関係考古資料写真一覧」『史料編集室紀要』22 沖縄県立図書館
- 石垣市教育委員会 2020『八重山における発掘調査——113年の歴史』石垣市史考古ビジュアル版第8巻
- 石井龍太・佐宗亜衣子・諏訪 元 2012「東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 荻堂貝塚出土器・石器標本」『東京大学総合研究博物館 標本資料報告』92
- 井関九郎 1917『現代防長人物史』 発展社
- 糸満市教育委員会 1981『糸満市の遺跡——詳細分布調査報告書——』
- 伊波普猷 1911『古琉球』沖縄公論社（伊波普猷 著・外間守善 校訂 2000『古琉球』岩波書店を参照）
- 上江洲 均 1976「資料紹介 池口権四郎の報告書『久米島事情』」『沖縄県立博物館紀要』2
- 大堀皓平 2014「琉球列島の石器・石器石材」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集 第1集 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- 沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚——第1・2・3次発掘調査報告——』
- 沖縄県立博物館・美術館 2021『博物館企画展 海とジュゴンと貝塚人——貝塚が語る9000年の暮らし—— 図録』

- 小畑弘己・盛本 勲・角縁 進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』No.4
- 金関丈夫 1929～1932「琉球の旅」『歴史と地理』24(6)～29(4)（金関丈夫1978『琉球民俗誌』法政大学出版局所収）
- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1964「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告 人文科学篇』(9)
- 川道 寛・片多雅樹 2018「長崎県における黒曜石原産地研究の進展(2)」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 宜野湾市史編集委員会 1985『宜野湾市史 第5巻資料編4』 宜野湾市
- 宜野湾市教育委員会 1996『ぎのわんの西海岸——土地利用・地名・海（イノー）・自然——』口承民俗文化財記録保存調査報告書
- 宜野湾市教育委員会 2005『読んで知る・ぎのわんの綱引き』市内民俗芸能調査報告書
- 国分直一 1981『台湾考古民族誌』考古民俗叢書18 慶友社
- 白木原和美 1978「クガニイシ」『法文論叢』41（松本雅明教授退官記念号） 熊本大学法文学会
- 高元政秀・新田重清・安里嗣淳・小田静夫 1997a「京都大学文学部博物館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』22
- 高元政秀・新田重清・安里嗣淳・小田静夫 1997b「関西大学博物館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』22
- 谷澤亜里・岩永省三 2021「玉泉館旧蔵考古資料：近年の再整理を経ての資料紹介」『九州大学総合研究博物館研究報告』18, pp.51-63
- 帝国法曹大観編纂会 1915『帝国法曹大観』
- 新田重清 2000「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 比嘉清和 2010「中の町小学校で発見された黒曜石原石について」『あやみや』18 沖縄市立郷土博物館
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について——沼津市土手遺跡BBV層の原産地推定から——」『静岡県考古学研究』26
- 山崎真治 2022「沖縄先史時代の赤色顔料関連資料（Ⅱ）——北中城村荻堂貝塚・うるま市天願貝塚・地荒原貝塚出土品の再報告とサメ椎骨製耳飾をめぐる問題——」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』15
- 山崎真治・谷川 遼・樋泉岳二 2024「資料紹介 會津八一記念博物館所蔵の沖縄関係考古・民俗資料について（上）」『會津八一記念博物館 研究紀要』25
- Anderson, A. and Summerhayes, G. (2008) Edge-Ground and Waisted Axes in the Western Pacific Islands: Implications for an Example from the Yaeyama Islands, Southernmost Japan. *Asian Perspectives*. 47(1).

Received Oct. 30, 2024; accepted Dec. 22, 2024

A material report about Ryukyu relics in the Gyokusen-kan Collection

Shinji YAMASAKI¹⁾, Masahiro FUKUNAGA²⁾, Masaki KATATA³⁾

¹⁾Okinawa prefectural museum & art museum, Omoromachi 3-1-1, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan

²⁾The Kyushu University Archaeological Research Office, Hakozaki, 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

³⁾Nagasaki Prefecture Archaeology Center, Fukaetsuruki-fure 515-1, Ashibe-cho, Iki, Nagasaki, 811-5322, Japan

We reported the Ryukyu relics in archaeological materials of the Gyokusen-kan Collection now stored at the Kyushu University Museum in this paper. They include stone tools such as stone adzes and Goryeo-style roofing tiles collected at pre-war Ryukyu (Okinawa Prefecture); Okinawa and Yaeyama islands. They are valuable because the collecting dates and places of them are clearly recorded. In addition, our detailed survey identified two obsidian pebbles which were previously unrecognized. These obsidian pebbles have different properties from the obsidian from Koshidake, Imari city, Saga Prefecture, which has been widely reported from Okinawa Prefecture. Their origins and history require further investigations.

Key words: Gyokusen-kan, Ryukyu, archaeological material, obsidian